

2026年度 須磨学園中学校入学試験



国 語

第 3 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、
受験番号シールを貼^はり、受験番号と名前を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
3. 解答は、1 行の枠内に 2 行以上書いてはいけません。また、字数制限のある問題につ^づいては、記号や句読点も 1 字と数えることとします。
4. 試験終^{しゅうりょう}了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

須磨学園中学校

一

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

【本文】

身体の問題というと、人はまず自分の身体を眺める。手を見、腕を見、さらには我が身をカガミに映しだしてみる。つまり、身体というと、人はまず個人の身体を思い浮かべるのだ。そしてたいていは、どこかしら恥ずかしくなって、

X

をすくめる。

5 身体は個人に屈するのであって、集団に属すわけではないというわけだ。だが、ほんとうはそうではない。仕草や表情にしてもそうだが、^A共同体の基盤は身体にあると言っているほどなのである。

日常生活の随所にその証拠がころがっている。たとえば、人はなぜスポーツを観戦するのか。勝敗の行方を見極めたいと思うからか。そうではない。人の身体の動きに同調してみたいのである。相撲で、ひとりの力士がドビヨウを割りそうになりながら残すとき、見るものも同じように反り身になって相手の回しを握り締めているのである。だからこそ、

Y

に汗握るのだ。つまり、

15 である。野球にしてもそうだ。投球が決まった一瞬、まるで指揮者に操られたように、会場の全体がどよめく。投手や打者の呼吸に、全観衆の呼吸が同調しているからである。それが人間の身体なのだ。

想像力といえば、意識の問題と考えられがちだが、そうではない。それはまず身体の問題なのだ。身体がまず他人の身体になりきるのである。その運動、その緊張、その痛みを分け持つてしま

う。(ア)

模倣もまた身体の想像力のひとつと考えるといい。人は、歩き

25 介して習うのである。実際、子供は、教えるよりも先に真似ている。身体 of 想像力は、意識の想像力を上回る。稽古事の経験者ならば誰でも思いあたるだろうが、言葉による注意は、身体 of 想像力のきっかけにすぎない。

舞踊に関心を持つようになってはじめて、以上の事実に気づいた。人はなぜダンスを見るのか。何よりもまず身体そのものが、他人の身体と同調したいからなのだ。舞台を見ると、人は、ダンサーとともに踊っているのである。回転し、跳躍しているのである。だからこそ、見終えた後に、^Cココロヨい疲労を覚えるのだ。また、だからこそ、より美しく舞うもの、より華やかに踊るものに惹かれるのである。スポーツにしても同じだ。人は、より強い、より速い、より美しいフォームに惹かれる。身体 of 想像力の限界を試そうとでもするように、人は舞台を見る。試合を見る。^C。見てるのは目ではない。身体なのだ。

そういえば、昔はよく、尊敬する人物の肖像や彫像を机上に

40 飾ったものだ。なぜか。見るのが、全身的な行為であると信じられていたからである。(イ) 意識の想像力以上に、身体 of 想像力が重要であることが、直観的に把握されていたからだ。人物だけではない。たとえば雄大な光景は人を雄大にする。人は全身で見るのであり、見た瞬間、何よりもまず身体がその光景に同調しようとするのだ。

このように考えると、なぜ舞踊と遊戯が神事として誕生したかが分かってくる。舞踊と遊戯、すなわちダンスとスポーツは、おそらくそのキゲン^dをひとつにしている。いずれも、身体を介して、人間が集団を成していること、共同体を形づくっていることを確認する行為にほかならなかったのである。神前で舞うとき、^e共同体のセイインもまたともに舞うのだ。相撲にしてもそうだ。観客もまた力を尽くして戦うのである。たとえば綱引きのような遊戯は、身体 of ^Dこのような共同性をそのまま象徴している。

近代になって、意識と身体はカクゼン^fと分けられた。同時に、55 五感とその領域も鋭く分割された。視覚の領域には美術が、聴覚の領域には音楽が配分された。そのいずれにもかかわる舞踊や演劇は、いささか曖昧な芸術として蔑まれた。身体 of 領域はただ健康の問題、医学の問題へと差し回されたのである。そして、ひたすら健康の技術にかかわるものとして、保健体育の思想が登場したのだった。

だが、いまや近代の全体が問い直されているのである。美術も音楽も、いや文学さえもが、じつは全身的なカンジュ^gの対象であることが明らかになりつつある。たとえば文体は、呼吸を通して全身にかかわるのである。芸術の鑑賞は、いまや身体 of 想像力を65 抜きに語ることではできない。(ウ) いわんや舞台芸術の鑑賞、スポーツの観戦にいたっては、まさに身体の問題にほかならないのである。(エ)

おそらく、新しい観客論がいま要請されているのである。そう、たとえばオリンピックを、^Eそのような観客論の立場から考察し直すような視点が要請されているのだ。

(三浦雅士『考える身体』による)

注1 残す…相撲の言葉で、主に力士が相手の攻めに対して粘ること。

注2 神事…神々に感謝や祈りを捧げる儀式全般のこと。

一 の設問

問一 X、Y に慣用句として当てはまる身体の一部の名前を、次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---------------------|---|----------------------|---|---------------------|
| 1 | 腰 <small>こし</small> | 2 | 拳 <small>こぶし</small> | 3 | 耳 |
| 4 | 手 | 5 | 顔 | 6 | 肩 <small>かた</small> |

問二 次の文を本文中に挿入そうにゅうするとき、最も適当な箇所を、本文中の(ア)～(エ)から一つ選び、記号で答えなさい。

想像力の基盤は身体にあるとさえ言いたいほどである。

問三 「共同体の基盤は身体にある」(――線部A)とありますが、筆者がこのように言う根拠こんきょは何ですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 スポーツ観戦をする人が、選手の動きと同じような動きをするとき、まるで指揮者に操さくられているかのように錯覚さくかくすること。
- 2 スポーツを観戦するとき、試合には直接関与かんよしないはずの観客が、選手の動きと同じような動きをし、会場が一体になっていること。
- 3 スポーツを観戦する人が、みな示し合わせたかのようにルールや技わざの心得を持っており、同じ基準で試合を観戦できること。
- 4 スポーツを観戦する人が、選手の洗練された動きを見て模倣もはくすること、言葉による指導を受けなくても、身体能力が上あがっていくこと。

問四 「身体の想像力」(――線部B)とありますが、これはどのような力のことですか。解答欄かいとうらんに合うように、本文中から八字で抜き出しなさい。

問五 「見ているのは目ではない。身体なのだ」(――線部C)とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人は、ダンサーや選手の動きを追うとき、視覚的情報によつて楽しんでいるのではなく、想像力の限界ちようげんに挑戦ちようせんしているということ。
- 2 人が舞台や試合を見るとき、ただ動きを目で追っているのではなく、その動きに全身を重ね同じ体験たいけんをしているということ。
- 3 人を魅了みりようする華やかな踊りや美しいフォームは、見る人にとつて単なる視覚情報ではなく、身体に直接作用する力を持つということ。
- 4 人が他者の演技を目にすると、その動きに自分の身体を重ねることで、目と同じくらい身体も、演技者と同じ感覚を味わうということ。

問六 「このような共同性」(――線部D)についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 身体が、他者と同じ動きをすることによって共同体を形成し、そのあり方を象徴する性質。
- 2 身体が、人間が共同体を形成していることを確認するため、神の前で舞踊や遊戯を始める性質。
- 3 身体が、属する共同体の動きに自然と呼応し、個人の意思とは無関係にひとりでに動きだす性質。
- 4 身体が、他者の動きに自然と重なり、そうして同じ動きをすることを通して、周囲と一体化する性質。

設問は、裏面に続きます。

問七 「そのような観客論」(――線部E)とありますが、これは観客をどのような存在としてとらえた考え方ですか。本文全体の内容を踏まえて、一〇〇字以上一二〇字以内で説明しなさい(句読点も一字と数えます。なお、採点は、どのような書かれ方をしているかについても見ます)。

下書き用(※これは解答用紙ではありません)

120		100		80		60		40	
									20

問八 本文の内容を正しく説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 身体は、個人にのみ関わるもので、集団に共有されたり、集団とひもづけられたりするべきではない。
- 2 人は何かを習うとき、他人の動きを真似ることに加えて、他者の注意をよく聞くことで上達してゆく。
- 3 近代では意識と身体が分けられ、身体は健康や医学に関わる物理的なものとしてのみ捉えられた。
- 4 芸術の分野に関わることは、身体との結びつきが薄いため、舞踊や演劇は軽視せざるを得ない。

問九 ~~~~~線部a~gのカタカナに相当する漢字を楷書で書きなさい。

- | | | | |
|---|---------|---|------|
| a | カガミ | b | ドヒヨウ |
| c | ココロヨ(い) | d | キゲン |
| e | セイイン | f | カクゼン |
| g | カンジュ | | |

問十 「本文」に関連した以下の「資料」を読んで、後の問いに答えなさい。

【資料】
模倣もほうに関連して、一九九〇年代の初めに、興味深いニューロン注1が発見された。「ミラーニューロン」だ。それはマカクザルの脳のF5野という部位から、J・リヅラッティ注2らの研究グループが発見したものである。(その後、人間の脳にも、サルのF5野に相当する部位に、このニューロンがあることが確認されている)。ミラーニューロンは、たとえば、サルが食べ物をつかむときに活性化するだけでなく、実験者がその同じ行動をするのをサルが見たときにも活性化する。これは、実験者が食べ物をつかむのをサルが見たとき、サルは潜在的せんざいてきに(つまり頭のなかで)その同じ行動をすることを意味する。

もちろん、このミラーニューロンは動作の模倣を可能にして、その動作を行う能力を獲得かくとくさせるものではない。サルはみずから食べ物をつかむことができるからこそ、実験者が食べ物をつかむのを見るとき、ミラーニューロンが活性化して、潜在的に食べ物をつかむという動作ができるのである。

したがって、これまで自分でできなかった動作がミラーニューロンによってすぐ模倣できるようになるというわけではない。もしそうであれば、どんな動作もミラーニューロンによって立ちどころに模倣できることになろう。

A、そう簡単にはいかない。やはり、模倣できるようになるには、何度も試行錯誤しこうさくごを重ね、反復練習をせざるをえない。

それでも、ミラーニューロンは模倣ができるようになるのに一役買っているかもしれないと考えられよう。サルが自分ではまだ食べ物をつかむことができないときでも、実験者が食べ物をつかむのを見れば、ミラーニューロンが活性化して、それによって潜在的に食べ物をつかもうとするだろう。もちろん、すぐにはその行動を模倣できないが、それでもとにかくそうしようと試みる。

B、この場合は、たんに潜在的に食べ物をつかもうとするだけではなく、C 顕在的けんざいてきに、つまりじつさいに手を動かして食べ物をつかもうとするだろう。ミラーニューロンの活性化はこのような顕在的な試行錯誤の学習を引き起こし、この学習を経て、サルはやがてその行動を模倣できるようになる。ミラーニューロンはこのように模倣の学習を促すうながという重要な役割を担っているかもしれないのである。

(信原幸弘「覚える」と「わかる」)

知の仕組みとその可能性』による)

注1 ニューロン：生物の脳や神経系を構成する神経細胞。
注2 J・リヅラッティ：イタリアの神経科学者。

設問は、次の用紙に続きます。

(1) **A**、**B**、**C**に当てはまる語を、次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。なお、選択肢はそれぞれ一回ずつしか使えません。

- | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | しかも | 2 | だから | 3 | いわば |
| 4 | まるで | 5 | しかし | 6 | むしろ |

(2) **「本文」**における筆者の主張と、**「資料」**におけるミラーニューロンの説明との関係について述べた次の文のうち、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 **「本文」** 20～21行目「身体がまず他人の身体になりきる」という現象は、**「資料」**により、ミラーニューロンの働きによって未経験の動作でも即座に可能になることであると説明されている。

2 **「資料」**のミラーニューロンの説明は、**「本文」** 40行目で述べられる「見ることが、全身的な行為である」という主張を、身体の仕組みの面から部分的に裏づけるものである。

3 **「本文」** 26行目「意識の想像力」は、**「資料」**に示されるミラーニューロンの活性化が引き起こす顕在的な試行錯誤の学習によって獲得される。

4 **「資料」**において、模倣は反復練習によって成立すると考えられているが、この考え方は**「本文」** 25～26行目「教えるよりも先に真似ている」という考え方と一致している。

(3) **「資料」**の内容を踏まえた場合、**「本文」**において筆者が「想像力」は「身体の問題」であると述べる理由の説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 想像力とは、他者の動きを見た瞬間に活性化するミラーニューロンの働きにより、その行動を頭の中で理解する能力を指すから。

2 想像力とは、ミラーニューロンの働きによって、無意識的に完全な模倣が成立することで、身体を動かせる能力であるから。

3 身体による模倣は、反復練習を経てできるようになるものであり、脳内のミラーニューロンが活性化することだけでは不可能だから。

4 他者の行為を見るとき、ミラーニューロンの働きによって、意識的な理解より先に、身体がその行為を潜在的に再現しようとするから。

二 次の文章は高田郁の『ふるさと銀河線』の一節です。不慮の事故で息子（徹）を亡くした父（瑛一郎）と母（諒子）が生前息子が旅した通りに北海道の陸別町を、息子からのハガキを頼りに訪れようとしているところです。本文を読んで、後の設問に答えなさい。

「ご旅行ですか？」

つり銭とレシートを瑛一郎に手渡ししながら、店番の女性が、気さくに話し掛けてきた。

瑛一郎は黙って頷き、それから、思い返して彼女にこう尋ねた。

「あの、この町で見えておくべきところは、どこでしょうか？」

「天文台、かしら」

「天文台？」

「ええ、銀河の森天文台というのがあるんですよ」

瑛一郎は重ねて問うた。

「それは古くからこの町にあるものですか？」

いえ、と女性は頭を振ってみせた。

平成十年のオープン、という情報を得て、夫婦は同時に肩を落とす。その様子を見て、女性は申し訳なさうに言葉を添えた。

「この季節だと他にはねエ。基本的に、何も無いところですから」

A 最後の一言に、瑛一郎と諒子は、思わず顔を見合わせた。諒子が、震えを抑えたような声で、復唱した。

「何も無いところ……」

「ええ。でも、ここで生まれ育った人が、一旦外へ出て、またこの地へ戻って来た時に、必ず言う台詞があるんですよ」

女性の両頬に、エクボが出来ている。

「何も無いけど、そこが良い」

『何も無いところですが、そこが良いのです』

女性の声が、徹のハガキの言葉に重なって聞こえた。

ふたりの脳裏に、一瞬、徹の笑顔が宿る。

諒子は、盛り上がる涙を隠すように、顔を背けて、先に店を出た。瑛一郎は、女性店員に、くぐもった声で礼を言い、妻の後を追った。

夜が、始まるうとしていた。

瑛一郎と諒子は、まるで申し合わせたように、旅館の前を通過して、さらに歩き続けた。

B 気付けば、町花だという福寿草をかたどったランタンが、オレンジ色の優しい光を放っている。足元の白い雪がうつすらオレンジ色に染まり、幻想的な世界に迷い込んだようだった。人通りもない道を、二人は黙々と歩いた。

「お父さん」

ふいに、諒子が、滅多に使わなくなった名で、瑛一郎を呼び止めた。少し先を歩いていた夫は、立ち止まって振り返った。

「どうしたんだ、母さん」

徹と暮らしていた時に使っていた懐かしい名で、瑛一郎も妻を呼んだ。

諒子は、何かに耐えるように拳を握り、声を絞り出した。

「独立し家庭を持った息子を失う親の悲しみより、夫に先立たれた真由美さんの方が辛い。まだ年端も行かないのに父親を失った彩香の方が不憫だ。そう思っ

て、お父さん、私、そう思っ

「うん」

「だから、人前でも悲しみを押し隠して。でも、でもね、お父さん、私が生んだあの子が、徹が、もうこの世にいない。家にも、この町にも……この世の、何処にもいない」

C 迷子になった子供のように、顔を歪めて、諒子は泣いていた。

瑛一郎は、妻をそっと抱き寄せる。

D 悲しみに順位などないのに。

一家の主を失う悲しみも、成人した息子を失う老いた親の悲しみも、愛しい人を失う悲しみに変わりはないのに、そんなところで一歩引いていた妻が、瑛一郎には不憫でならなかった。

E 突然、貫くような悲しみが、瑛一郎の胸倉を掴んで、激しく揺さぶった。

息子が生まれたと知らされて、産院に走ったあの日。成長する過程で時として小さな嵐はあっても、諒子と徹と瑛一郎、家族として過ごした陽だまりのような日々。だが、その徹は、もういないのだ。

二年経ってなお、その不在に慣れない。慣れる筈がない。

諒子と瑛一郎は、互いの身体をきつく抱き締め、身を震わせて泣いた。

どのくらい、そうしていたのだろう。瑛一郎は、誰かに呼ばれた気がして、顔を上げた。

満天の星が、頭上にあった。両の掌を向ければ、零れ落ちて来そうな、無数の星々。

「諒子」

瑛一郎は、妻の体を揺すって、言った。

「諒子、ご覧」

夫に倣って空を仰いだ諒子が、息を呑み込んだ。

月の無い夜だった。漆黒のビロードにガラスの粉を撒いたように、びっしりと隙間無く無数の星が瞬いている。

問題文は、裏面に続きます。

諒子が、両手を広げて、叫んだ。

「あなた、あなた、星が落っこちて来そう！」

「ああ」

妻を真似て、星を受け止めるように天を仰いだ瑛一郎は、不思議な思いに駆られていた。

今、この瞬間。

周りの一切が消え去り、自分という一つの生命体が、宇宙の中に溶け込んで行く。目に見えない、何か大いなるものの存在に、魂ごと抱き留められている。あらゆる苦悩や、悲しみ、切なさ。そうした感情の向こうに、温かな光が瞬くような。

徹。

徹、お前も、これを見たんだな。

「不思議なの」

諒子が静かな声で言った。

「徹が、今、傍にいるような気がしてならない」

「いるんだよ、きつと」

瑛一郎の言葉に、諒子は、密やかに頷いた。二人は暫くの間、黙って星空に心を委ねた。

声を聞くことも、手で触れることもかなわなかったけれど、確かに徹の魂は今、傍にいます。瑛一郎にも諒子にも、それが信じられた。

宿への帰り道、駅近くのコンビニで、ふたりは、官製ハガキを一枚、買った。カウンターの隅を借りて、両親は、息子に返信を書いた。

諒子が長い間かかって考え、思案した末に書いた文を読んで、瑛一郎は、手にしたペンを収めた。書き加えることがなかった。そこには、こう記されていた。

徹へ

ふたりで陸別に来ています。

ここは、お前に逢える町です。

注1 真由美：徹の妻。彩香は徹の娘。

注2 ビロード：光沢のある柔らかな起毛織物。

二の設問

問一 本文中の「くぐもった」(~~~~~線部ア)・「年端も行かない」(~~~~~線部イ)の意味として最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

ア「くぐもった」

- 1 声がよく通ってはつきりしている様
- 2 声が低くおさえられ、はつきりしない様
- 3 声が震えてうわずっている様
- 4 声が大きく、よく響いている様

イ「年端も行かない」

- 1 年齢が一人前に到達していないこと
- 2 年齢だけでなく、精神的・社会的にも未成熟であること
- 3 人生の初期段階であり、今後の成長が期待されること
- 4 年齢に関係なく、経験が乏しく世間知らずであること

問二 「最後の一言に、瑛一郎と諒子は、思わず顔を見合わせた」

(——線部A)とありますが、ここで二人が顔を見合わせた理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 女性が「基本的に、何も無いところですから」と言った言葉が、自分たちの想像していた町のイメージと大きく異なっていたため、戸惑いと驚きの気持ちを共有するために自然と顔を見合わせた。

2 女性の「何も無いところ」という表現が、二人にとっては重みのあるものとして響き、旅に出た目的を達成できるのではないかと期待を持ったため、自然に目を合わせた。

3 女性が言った言葉に対して、これから町で何をすべきかをすぐに判断しなければならぬと感じ、互いの意見を確認するために顔を見合わせた。

4 女性の「何も無いところ」という表現を、軽い冗談だと思いい、一瞬どう反応してよいかわからなかったため、思わず顔を見合わせた。

問三 「気付けば、町花だという福寿草をかたどったランタンが、オレンジ色の優しい光を放っている。足元の白い雪がうつすらオレンジ色に染まり、幻想的な世界に迷い込んだようだった」(——線部B)とありますが、この箇所表現の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 きれいで華やかな情景を描写することで、夫婦の気持ちも亡き息子の思い出の地を訪問でできる期待で胸を膨らませていることを表している。

2 北海道らしい雪を描写することで、外の寒さを表現しつつ、外の厳しい寒さとは対照的に夫婦の心の中には希望の光が灯って、温かな気持ちになっていることを表している。

3 息子の死という暗い思いで、足元もおぼつかない夫婦の行き先を、ランタンの優しい光が指し示すという筆者の優しさが感じられる表現となっている。

4 亡くなった息子の存在を夫婦が感じるという後半のやや非現実的な内容を描写するにあたって、幻想的な場面に読者を誘う表現となっている。

問四 「迷子になった子供のように、顔を歪めて、諒子は泣いていた」(——線部C)とありますが、この時の諒子の心情として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分の悲しみを外に見せたくなく、強がって感情を抑えながらも、内心では息子を失った悲しみに深く押しつぶされそうになっているが、泣くこと自体に罪悪感を感じている。

2 どうしても自分の息子の死を受け入れることができず、悲しみをこらえて生きている自分のことを、誰も理解してくれず、孤独で、寂しいと感じている。

3 自分の悲しみを隠し、平然としているようではいるながらも、息子の死を受け入れることのできない自分自身をどうしたらよいのかわからず、悲しみに暮れている。

4 人前では悲しみを隠しつつも、心の中ではどうにもならない悲しみを抱えていることに誰も気づかず、どうして自分の悲しみを見つけれ出してくれないのか戸惑い悲しんでいる。

設問は、裏面に続きます。

問五 「悲しみに順位などないのに」(——線部D)とありますが、この時の瑛一郎の心情として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 妻が他人の悲しみを優先して自分の悲しみを抑えている様子を見て、悲しみは等しく尊重されるべきだと感じ、妻を優しく諭そうと思っている。
- 2 愛しい人を失くした悲しみに順位など本来ないのに、妻が息子家族の悲しみを優先し、気丈に振舞っていたことに気づけなかった自分を責めている。
- 3 妻が、なぜ息子家族の悲しみを優先するのかわからず、そのように考えた理由について自分なりに懸命に解明しようと思っている。
- 4 大切な人を失う悲しみは等しく、順位をつけることなどできないのに、息子家族に遠慮して悲しみをこらえていた妻を気の毒に思っている。

問六 「突然、貫くような悲しみが、瑛一郎の胸倉を掴んで、激しく揺さぶった」(——線部E)とありますが、この時の瑛一郎の心情として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 愛する妻に悲しい思いをさせていたことに改めて気づかさ
- 2 大切なわが子を守れなかっただけでなく、愛する妻にも寂しくつらい思いをさせていたことに気づき、どうにもならない強い悲しみがこみあげている。
- 3 大切な息子を亡くしたこと、家族との大切な日々が失われたこと、それらが妻の悲しみにふれることによって改めて想起され、強い悲しみがこみあげている。
- 4 妻同様に、周囲をはばかりてこらえてきた悲しみが、妻の癒えることのない悲しみにふれることでせき止められなくなつて、強い悲しみに揺さぶられている。

問七 本文の に入る文として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 徹は二度と帰らない、けれど、今、自分たちは、徹の魂の行き着いた先を見ている。
- 2 徹が生きていた時の思い出が次々と浮かび、その悲しみに二人は涙を流した。
- 3 夜空を見ながら、これからの生活や家族のあり方について真剣に話し合った。
- 4 町の景色やランタンの光に目を奪われ、悲しみを一時的に忘れることができた。

問八 この物語において、星空の場面は瑛一郎と諒子にどのような意味をもたらしましたか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 圧倒的な星空を前にして、亡き息子の魂の存在を強く感じ、悲しみや苦悩をつつみ込むような不思議な安らぎを得る場面となった。
- 2 星の美しさに魅了され、自然の力の偉大さを再認識するとともに、息子の死という事実を受け入れ、心の整理を完全に終える場面となった。
- 3 幻想的な星空を見ることで、亡き息子も以前この星空を見上げたことを確信し、ようやく息子の魂を弔うことができる
- 4 無数の星空を眺めていると、亡き息子の魂が自分たちのすぐそばにいると確信し、息子の死という悲しみや苦悩を忘れて日常を取り戻す場面となった。

問九 この文章の内容や表現の特徴を説明したものととして適当でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「徹、お前も、これを見たんだな」「徹が、今、傍にいるような気がしてならない」のように、読点を巧みに用いて人物の細かな心情を表現している。
- 2 この文章では「ガラスの粉を撒いたように」「温かな光が瞬くような」など、比喩表現を巧みに用いながら、情景を描き出している。
- 3 「目に見えない、何か大いなるものの存在に、魂ごと抱き留められている」のように大きな宇宙の存在を描くことで、人の生や死など小さなことにすぎないと読者に印象付けようとしている。
- 4 「お父さん」とふいに亡き息子が生きていた頃に使っていた呼び名を妻が使う場面を事前に挿入することで、亡き息子を近くに感じるという非現実的な後半部分を読者が素直に受け入れられるようになっている。

[illegible]

名前	
----	--

1

(※の欄には、何も記入してはいけません)

(※の欄には、何も記入してはいけません)

